

# 恩師粵王先生亡き今思ふこと（七）

坪 博康

## 米國分析の要諦

平成二十七年十月二十六日

恩師粵王先生逝去せられ本日早くも一年を迎ふ。先生は情報分析を第一のライフワークとせられ、外務省時代より就中米國に關する情報分析を重視し給へり。左に、先生の外務省調査企畫部長時代の村田良平同省經濟局長（當時）らとの鼎談（註）より米國分析の要諦に關する部分を文語譯出し、此の機に我備忘録とす。

（始）米國研究の要諦は米國の動きを如何に的確に把握するやに在る。其の爲の手法は是迄の地域研究の手法とは異なるべし。アングロサクソンの世界又はデモクラシーの世界に關する研究は、例へば共產圏研究等の他の手法と異なる。ヒットラーも其の點を誤解す。英國や米國の出方を見るに、間諜を送る必要は全くなし。新聞の切抜きを丹念に讀み、倫敦、華盛頓、紐育の知識層集團に頻りに出入りし、其の大體の雰囲気を把握し得る人材を確保せば、米國や英國が如何に動くやは自づと判斷附くべし。開戦前夜の日本に於て、日本が南部佛印進駐せば米國が如何に出づるやは、斯かる人材がローズベルト大統領やハル國務長官の意圖に就き仄聞せし内容を本國へ報告し、其の情報に日本政府首脳部の讀む處とならば、彼様なる（開戦といふ）事態に至らざらまし。米國研究は、他の地域研究とは異なり、政界、財界、官界、學界の全てを集結し、米國の政策決定者に近き層に居る人材の知識や判斷を常時總合し得る形を作るに如くはなし。（終）

顧へらく、嘗て伊藤博文公祕書官の古谷久綱、自書『藤公餘影』に於て曰く、公の精力絶倫なる日々數種類の新聞紙を讀まれ、又、ロンドン・タイムズ、コンテンポラリー・レビュー、ノースアメリカンやレビュー等を購讀せられ、就中極東問題に關する論文には特別注意を向けられ、其最も必要なるものには時々翻譯せしめて、英語を解せざる高位大官の人々に配布せらるる事もあり、と。粵王先生の公開情報の丹念なる讀解を何よりも重んぜられし點、伊藤公の著眼と相通ずる處あり。

的確なる情勢判斷は先づ以て公開情報の精讀を基礎とす。小生、此の眞理を決して忘れじ、と思ひを新たにす。

（註）北村汎（外務省北米局長）・村田良平（同省經濟局長）・岡崎久彦（同省大臣官房調査企畫部長）『日米關係を問ひつめる』（世界の動き社、昭和五十八年）、二四三頁～二四四頁（「アメリカの動きをいちばんよく讀む方法」）。

（平成二十七年十一月十四日受附）